家庭における教育虐待の構造的要因の検討
―行為者のライフヒストリーを通して―

森田友華（株式会社メタフォー/武田塾）

1980 年の神奈川金属バット両親殺害事件をはじめとして、学歴獲得の強制、勉強への過剰な期待、親への絶対的服従、さらには身体的・精神的な暴力が繰り返された結果、家庭内での教育が凄惨な事件へと発展する事例が報告されてきた。2011 年には当時武蔵大学教授であった武田信子氏が「教育虐待」という概念を提示し、「子どもの受忍限度を超えて勉強させることは教育虐待である」と定義づけた（武田, 2021）。その後も、2016 年の名古屋小 6 受験殺人事件、2018 年の医学部受験浪人をめぐる母親殺害事件、2023 年の元九州大学生による両親刺殺事件などが続き、教育虐待に対する社会的な関心と認知が高まってきた。

しかしながら、これまでの研究の多くは被害者である子どもに焦点を当てたもの、あるいはルポルタージュに留まり、教育虐待を行った親がどのような教育観や人生経験を通して「虐待」に至ったのか、その形成過程に着目した研究は依然として不足している。

本研究は、教育虐待を行ったことを自覚する母親へのインタビューを通じて、その語りから教育虐待の要因を抽出し、個人の性格や倫理観では説明しきれない社会的・構造的背景を明らかにすることを目的とする。インタビューは非構造化形式で実施し、2 名の語りを分析対象とした。対象者のうち 1 名（以下 A さん）は地方出身の高卒で、中学受験および大学受験において娘の進路選択に強く介入した経験を持つ。もう 1 名（以下 B さん）は地方出身の大卒で、シングルマザーとして二人の息子を育てる中、特に次男に対して学業面だけでなく性格面でも矯正的な関与を行っていた。

両者の語りには、以下の 7 点にわたる特徴が見出された。

1. 貧困家庭の出身で、金銭的な理由により希望する進路に進めなかった経験がある。
2. 学歴の欠如が原因で、自身または配偶者・家族が経済的に苦労した経験を持つ。
3. ジェンダー差別により夢を断念した経験がある。
4. 「学歴さえ得られれば、社会的地位と経済的安定を得られる」という強い信念がある。
5. 「母親こそが子どもの一番の理解者である」という思い込みがある。
6. 父親が不在または育児に非協力的であり、育児責任が母親に偏っている。
7. 母親としての価値は、子どもの進路によって決まるという認識がある。

インタビューを通じて明らかになったのは、これらの特徴の背景には、「自分のような人生を子どもに繰り返させたくない」という強い思いがあるという点であった。A さん・B さんはともに、自らが経験した困難を起点として、子どもをより良い階層へと移動させること＝階層再生産からの脱却を目的に、過剰な教育介入を正当化していた。このように、教育虐待は時に、親自身の上昇志向や再生産からの脱却という社会的目標のもとで無意識的に行われていたことが浮かび上がった。これらは、教育虐待の原因が単なる個人的な情緒的衝動ではなく、社会構造的な要因に根差している可能性を示唆している。

本研究は、加害を自認する当事者の語りを聴取・分析することで、教育虐待の多面的な構造を明らかにした点に意義がある。一方で、本研究は比較対象となる「教育虐待を行わなかった親」の語りを含まないため、これらの特徴が「加害者に特有のもの」であるとは断言できない。この点は今後の研究課題である。

キーワード：教育虐待、世代間再生産、学歴社会